

近代における和語の表記の変遷

——複数表記から単一表記へ——

Changes of Character Usage in Native Japanese Words in Kindai

——Multiple Notations to Single Notation——

博士前期課程 国際日本学専攻 2014年度入学

高 橋 雄 太

TAKAHASHI Yuta

【論文要旨】

本研究は、『太陽コーパス』における動詞を対象として、近代における和語の漢字表記の経年的変化を全体的に調査した。表記の推移によって動詞を、単一の表記が使われ続ける「単一型」、単一の表記だったものが複数の表記に分かれる「分岐型」、複数の表記があったものが単一の表記に合一していく「合一型」、複数の表記が使われ続ける「複数型」の4つの型に分類し、そのうち「合一型」に属する語の用例を詳しく分析することで、表記が合一していく過程とその要因について考察した。調査の結果、複数あった表記がより広範囲に使用される表記に合一していくことと、語の意味が変化したことによって意味による書き分けが不要となっていくことが明らかになった。

【キーワード】 近代、和語の表記、表記の揺れ、『太陽』、コーパス

1. はじめに

明治・大正時代を中心とする近代は、語の表記が揺れていた状態が統一されていった時代である。これまでの近代語の表記の研究は、田島(1998)など、漢語が中心的に扱われてきたが、和語はあまり調査がされてこなかった。近代の和語を中心に調査した研究では、熟字的・表音的表記の衰退や、特定の語の仮名表記への移行などが報告されている(京極 1998, 片山 2012)が、特徴的な語や特定の著者に対象が限定されている。その他、辞書や印刷、国語政策の影響など多角的に表記の変遷の研究が行なわれてきた(今野 2013)が、やはり特定の語や資料の分析にとどまっ

ており、和語全体からの観察は行ってはいない。これらのことから、和語の表記全体を分析した研究が行なわれていないという問題点が指摘できる。

こうした問題点を解決するためには、対象とする語、書き手、ジャンルにおいて偏りを持たせず、大局的に和語の表記の変遷を捉え分析することが求められる。本研究では、和語の表記の全体的な調査・研究を、『太陽コーパス』を用いて行うことで、近代における和語の表記の変遷とその要因を明らかにすることを目的とする。

2. 調査方法

2.1 『太陽コーパス』

『太陽コーパス』は博文館より刊行された総合雑誌『太陽』の、1895（明治28）年、1901（明治34）年、1909（明治42）年、1917（大正6）年、1925（大正14）年の5年分（計60冊分）を対象としたはじめての近代語のコーパスであり、総字数が約1450万字という大規模のものである。30年間の経年変化を観察できる他、分量の多さ、多様な記事ジャンル、著者層や読者層の厚さという利点が言われており（田中 2005）、表記の変遷を調査するのに有用な対象資料と言える。本研究では、2005年に公開された製品版の『太陽コーパス』を利用する部分と、2016年に公開する予定の増補版の『太陽コーパス』を利用する部分とがある⁽¹⁾。

2.2 形態素解析による調査対象語の選定

調査の対象とする語は動詞とする。動詞を選んだのは、和語の自立語のうち、表記の揺れが大きく、基本的な高頻度語が多く属するため適切と考えたためである。

まず『太陽コーパス』（製品版）のXMLデータに対し、「近代文語 UniDic」（MeCab版）による形態素解析を施す。形態素解析によって、内蔵の辞書の語区分に従ってテキストが単語単位に区分けされ、各語に形態素情報（品詞や活用など）が付与される。解析結果を集計し、語別、及び年次別の頻度を表にすることで、調査の基礎データを作成する。

作成した基礎データを基に、調査の対象とする動詞の選定をする。調査の対象とする語⁽²⁾は、次の条件を満たすものとする。

- 頻度100以上、1500以下である。
- 複合語ではない。

経年的変化を分析するには各年20件は必要であり、5年分のデータを対象とする『太陽コーパス』においては、調査の対象の頻度の下限を100と設定した。また、総語数約503万語の『太陽コーパス』において、頻度100は100万語あたりの相対頻度が約20であり、日常的に会話や文で使用する語が相当する。また、1500以上の高頻度語は、シタガウやヨルの接続詞的用法や、イクヤクルの

補助動詞用法などの特殊な機能を持つ語が大半を占めるため、調査から除外した。

2.3 語の表記の集計

2.2で選定した各語における表記に対しても、特定の著者による限定的な表記の使用や、一般的でない当て字などを除外するために、次の条件を満たす表記のみを調査の対象とする。

- ・頻度10以上の表記である。

さらに、『太陽』では、動詞を平仮名で表記することはあまり一般的でないため対象から除外し、熟字訓は使用頻度が低いため対象から除外した。

3. 調査結果

2.2及び2.3で選定した語と表記について、その経年変化を観察するために、増補版の『太陽コーパス』を用いて用例を収集した。増補版の『太陽コーパス』を用いるのは、製品版では他の年次に比べて分量が少なかった1917年・1925年の記事が大幅に増補され、他の年次とほぼ同程度となっており、経年変化の対象資料としてより適切だからである。まず、語毎に年次別・表記別の頻度を算出し、1895年と1925年の2つの年次の頻度に注目して、各語の表記が単一か複数かを判定した⁽³⁾。

表記の判定基準は、「最高頻度の表記の5%以上の頻度を持つ別の表記の有無」とした。

例えば、イノルの表記には「祈」と「禱」があるが、1895年と1925年の各表記の頻度を示すと、表1になる。

表1 「イノル」における各表記の年次別頻度

表 記	1895年	1925年
祈	51	30
禱	4	0

1895年時点での最高頻度の表記である「祈」の頻度51を100%とすると、「禱」の頻度4は7.8%であり、5%を超えるためイノルの表記は「複数」と判定する。一方1925年では、「祈」の頻度30に対して「禱」の頻度0は0%であるため「単一」と判定する。また、サガスについて同様の情報を示すと、表2になる。

表2 「サガス」における各表記の年次別頻度

表 記	1895年	1925年
探	8	63
搜	7	36

1895年では、最高頻度の表記である「探」の頻度8に対し、「捜」の頻度7は87.5%であるため、「複数」と判定する。1925年では、「探」の頻度63に対し、「捜」の頻度36は57.1%であるため、「複数」と判定する。

これらの判定を全ての語に対して行い、さらに語の表記の推移を、次の4つの型に分類する。

- ・「単一型」(1895年：単一 → 1925年：単一)
- ・「分岐型」(1895年：単一 → 1925年：複数)
- ・「合一型」(1895年：複数 → 1925年：単一)
- ・「複数型」(1895年：複数 → 1925年：複数)

前出のイノルは1895年に複数、1925年に単一であったため合一型に、サガスは1895年に複数、1925年に複数であったため複数型に分類する。

現時点までで整理のついで動詞100語を分類したものが表3である。

表3 動詞100語の分類と比率

分類型	動 詞 一 覧
単一型 48語 48%	アザムク アラウ アルク イソグ イトウ ウタガウ オトロエル オドロク カギル カザル カナシム カネル キエル キズク キソウ キラウ コシラエル サケブ サマタゲル シズム スウ スム(済) チル ツイヤス テラス トガメル ナグサメル スル ノノシル ハコブ ハバカル ヒビク ホコル マジワル マネク マヨウ ミチビク メス モタラス モヨオス ヤク ヤシナウ ヤスム ユズル ヨウ ワスレル ワタス
分岐型 3語 3%	シノブ ソムク ヘダテル
合一型 31語 31%	アヤシム イノル ウエル(植) エラブ オビル カガヤク カマウ カム カンガミル クルシム サトル サワグ ソエル タタク タノシム ツカム ツキル ツナグ トウトブ トトノウ ナガメル ニクム ノガレル ハレル ヒキイル フセグ ヘル(経) ムカエル ヨソオウ ヨブ ワク(沸)
複数型 18語 18%	アウ ウラム オス オドル クラベル サガス サカノボル スム(住) セマル タダス トブ ナラウ ナレル ノム ハサム ヒロゲル ミタス ワラウ

分岐型と複数型を合わせた21%の語では、1925年においても複数の表記が対応している。高橋(2015)では、複数型に属するアウの用例分析によって、アウの持つ特定の意味と、特定の表記との結合が強まっていく過程を明らかにした。分岐型については未考察だが、やはり語の意味と表記の結合の観点からの研究が重要になると考えられる。

最も比率が高いのは単一型の動詞で、全体の約半数にあたる。語と表記が一对一の対応をしており、明治・大正時代においても一表記に固定されていた語である。その次に比率が高いのは合一型の動詞であり、単一型と合一型を合わせた79%の語は、1925年の段階で語と表記の対応がほぼ一

対一に固定しているとみることができる。

本調査では、単一型を除いた中で最も比率が大きく、表記の合一の過程を観察することのできる合一型を調査・研究の対象とする。意味分類による用例分析から、表記の揺れと合一の要因の考察をする。

4. 事例研究

4.1 ハレル

動詞ハレルには、主要な表記として「晴」と「霽」が使用されていた。各表記の頻度の推移を示すと、次の表4ようになる。

表4 「ハレル」における各表記の年次別頻度

表記	1895	1901	1909	1917	1925
晴	21	25	22	42	34
霽	9	6	10	3	1

1895年から1925年まで「晴」が優勢であるが、1909年までは「霽」についても「晴」の半数程度の頻度が保持されていた。「霽」の使用が減少するのは1917年で、1925年の使用はわずか1件のみとなり、この段階ではほぼ「晴」に吸収されたとみることができる。

表4では頻度の推移から表記の変化を観察したが、このような実態にある背景を考えるには、実際の用例を観察しどの表記がどの意味と結びつくかを確認しなければならない。(1)~(5)には、ハレルの用例を示す。

- (1) 晴朗な空は高く晴れて、やがて来る暑熱の日を思はせる光の雨が羞明しいほどに…
(1925年, 三上於菟吉「蛇人」『太陽』)
- (2) 海は晴れて、水の色は心ゆくばかり…
(1901年, 川上眉山「左巻」『太陽』)
- (3) …一度思ひ知らせでは鬱憤霽れがたしと云ひ…
(1895年, 小倉秀貫「加藤清正」『太陽』)
- (4) いくら厳正に、忠實に、宣言を履行しても、疑ひは晴れぬ。
(1909年, 著者不明「大流小流」『太陽』)
- (5) …云はゞ戀敵の男と愛人と天下晴て同棲出来るやうに親身になつて力を盡した。
(1917年, 内田魯庵「恋愛の破産時代」『太陽』)

ハレルは(1)や(2)のように天候, (3)のような感情, (4)のような疑惑など、様々な語を主語に取る。また、(5)のような「天下」を主語として取る定型句(近代においても「天下」を記述しない例が多

い) もあり、多様な意味を持つ。これらの主語の違いによって表記間に差異があることを確認するために、表5のように天候、気分、疑惑、天下の4つの意味に用例を分類する。なお本調査では、(1)の空や(2)の海のような場所、または午後や今日のような時間に関する主語や、空主語、連体修飾節でのハレルの使用に関しても、動詞に対する主語に相当するものとして扱う。

表5 「ハレル」の意味分類と主語の例

意味分類	主 語 の 例
天 候	空, 雨, 雪, 曇り, 天気, 海, 日, みずうみ, 東, 霧, 天, 風など
気 分	苦しき胸, 気, 憤恨, 鬱憤
疑 惑	審かしさ, 疑い, 不審
天 下	「天下晴れて」の略, 空主語の用例含む

この分類に従って、年次別の各意味分類の用例数と比率を示すと、表の6になる。

表6 「ハレル」の各意味分類の年次別頻度と比率

意味分類	1895	1901	1909	1917	1925
天 候	22(73.3%)	28(90.3%)	30(90.9%)	40(90.9%)	33(94.3%)
気 分	3(10%)	3(9.7%)	0(0%)	2(4.5%)	0(0%)
疑 惑	3(10%)	0(0%)	2(6.1%)	0(0%)	1(2.9%)
天 下	2(6.7%)	0(0%)	1(3.0%)	2(4.5%)	1(2.9%)

頻度においては、1895年の段階で天候の意味が優勢であるものの、1901年以降と比較すると、様々な意味分類でハレルという語が用いられていたことが分かる。1901年以降は、用例が天候の意味に集中し、意味の一極化がみとれる。

次に、各表記の頻度と比率を意味分類別に示すと、表7になる。

表7 「ハレル」の各表記の意味分類別頻度と比率

表 記	天 候	気 分	疑 惑	天 下
晴	126(88.1%)	6(4.2%)	5(3.5%)	6(4.2%)
霧	27(90.0%)	2(6.7%)	1(3.3%)	0(0%)
合 計	153(88.4%)	8(4.6%)	6(3.5%)	6(3.5%)

両表記に共通して天候の意味での使用が多く、その他の意味は周辺的であることが言える。両表記の差異としては、「霧」は天下の意味では一切使用されないことが挙げられる。また、「霧」の気分の2件には「迷いの雲が霧で…」という用例が1件含まれ、天候と気分の間とも捉えられる。よって、「晴」と比較して、「霧」は限定された意味でしか使用できないと考えられる。

4.2 オビル

オビルでは「帯」と「佩」の表記が使用されるが、大正期を経て、「佩」の使用が減少する語である。各表記の年次別の頻度を示すと、表8になる。

表8 「オビル」における各表記の年次別頻度

表記	1895	1901	1909	1917	1925
帯	128	84	85	53	74
佩	8	0	1	2	0

1895年の段階で「帯」が「佩」に対して優勢であり、1901年以降は「佩」の使用が極めて限定的になる。オビルという語自体が若干の減少傾向にあるが、表記の面では単一の表記に固定されたと言える。(6)～(9)には、オビルの用例を示す。

- (6) …常に好んで村正の大刀を帯び、酔へば此刀を以て賊將軍の頭を斬らんと傲語して居た…
(1917年、松本頼平「史実に顕れたる村正の怪異と徳川家との因縁」『太陽』)
- (7) 葉は狭長にして尖り、葉柄を具へず、淡緑色で少し白味を帯びて居る。
(1909年、荅洲学人「季節の花」『太陽』)
- (8) バルフオア氏は特別使命を帯び渡米するに決すと。
(1901年、著者不明「日誌」『太陽』)
- (9) 平生身をは離さず佩びし彼の金銭の五十文を表記となさんと私に案じ…
(1895年、倅田露伴「元時代の雑劇(三)」『太陽』)

オビルは(6)の刀などの具体物、(7)の色のような性質、(8)の使命など、多様な語を対象語に取るが、これらは外面に所持するか、内面に所持をするかの2つに大きく分けることができる。(6)の大刀、(9)の金銭は外面の所持にあたり、(7)の白味や(8)の使命は内面の所持にあたる。以下の表9には意味分類と例を示す。なお、本調査では(9)のようなヲ格を取らない用例に関しても、動作の対象が明確である場合、対象語に相当するものとして扱う。

表9 「オビル」の意味分類と対象語の例

意味分類	対 象 語 の 例
外面的所持	大刀、劍、勲章、服、弓、袋、金銭、水筒、水蒸気、煙、雨など
内面的所持	色、使命、酒気、笑顔、憤怒、権利、きらめき、性質、価値、任務など

この分類に従い、年次別の用法の比率を示すと、表10になる。

表10 「オビル」の各意味分類の年次別頻度と比率

意味分類	1895	1901	1909	1917	1925
外面的所持	35(25.9%)	8(9.5%)	2(2.3%)	9(16.1%)	3(4.1%)
内面的所持	101(74.1%)	76(90.5%)	84(97.7%)	47(83.9%)	71(95.9%)

表10から、内面的所持の用例が1895年の段階で約3/4を占めていることが分かる。1901年以降ではさらに外面的所持の用例が減少し、オビルという語自体が内面的所持を中心に意味する語になったとみることができる。

一方、各表記における意味分類別の比率を推移で示すと、表11、表12になる。

表11 「帯」の意味分類毎の年次別頻度と比率

意味分類	1895	1901	1909	1917	1925
外面的所持	101(78.9%)	77(90.5%)	84(98.9%)	47(88.7%)	71(95.9%)
内面的所持	27(21.1%)	8(9.5%)	1(1.1%)	6(11.3%)	3(4.1%)

表12 「佩」の意味分類毎の年次別頻度と比率

意味分類	1895	1901	1909	1917	1925
外面的所持	8	0	1	2	0
内面的所持	0	0	0	0	0

「帯」は1895年ではある程度外面的所持の意味でも使用されるが、1925年に向けて内面的所持の意味での使用に限定されることが表11からみてとれる。一方、表12からは、「佩」が内面的所持の意味では一切使用されないことが分かる。

また、表10、表11で外面的所持の意味の使用頻度が下がっていることから、この語に意味の変化が生じていることが言える。さらに、「佩」は外面的所持の意味でしか使用できないことから、「佩」を使用しなくなった背景には、動詞の意味変化が関連していると考えられる。

4.3 ツナグ

ツナグには「繫」と「維」の表記が使用されており、各表記の年次別の頻度を示すと、表13になる。

表13 「ツナグ」における各表記の年次別頻度

表記	1895	1901	1909	1917	1925
繫	45	28	33	29	10
維	6	5	9	1	0

「繫」と「維」の両表記ともに減少傾向にあるが、「繫」が継続して使用されるのに対し、「維」

は1925年では使用されず、1917年の時点で使用率5%を切っている。(10)～(12)には、ツナグの用例を示す。

(10) 詔して其馬を繋ぎたる体を書かしめければ、離れずなれりと云ふ。

(1901年, 高山樗牛「王朝の絵画」『太陽』)

(11) 自由を束縛せられ、僅かに衣食して、命を繋ぎ、非常の拘束を受けて…

(1901年, 麴町坊「御店小僧手代の現状」『太陽』)

(12) …平生より儉勤の徳を守らざれば到底信用を維ぎ難く候。

(1901年, 内田魯庵「虚業家尺牘数則」『太陽』)

ツナグは大きく分けて二つの対象語を取り、それらは(10)のような具体物と、(11)と(12)のような抽象概念である。具体物を対象とする場合には、専ら対象物を物理的に接続し、離れないようにする「接続」の意味で使用される。一方、抽象概念を対象とする場合には、ある状態を維持、保持する意味で使用される。本調査では表14のように、接続と保持の意味に分類することで、表記の傾向を分析する(抽象概念を対象とする用例でも、接続の意味に取れる用例が存在したが、一概に保持ではないとは言い切れないため、本調査では厳密に具体物か抽象概念かによって意味を区別した)。

表14 「ツナグ」の意味分類と対象語の例

意味分類	対 象 語 の 例
接 続	船, 馬, 橋, 電線, 手綱, 大象, 小舟, 呼吸器, 赤縄, 人(牢獄に)など
保 持	命, 心, 利益, 関係, 因縁, 威信, 秩序, 自我, 生計, 望, 利益など

この分類に従って、年次別に比率を示すと、表15になる。

表15 「ツナグ」における各意味分類の年次別頻度と比率

意味分類	1895	1901	1909	1917	1925
接 続	29(55.7%)	12(36.4%)	15(35.7%)	18(60.0%)	7(70.0%)
保 持	23(44.3%)	21(63.6%)	27(64.3%)	12(40.0%)	3(30.0%)

年次によって接続の意味が優勢の年と保持の意味が優勢の年があるが、単純な頻度の推移では、後年になると接続の意味に用例が偏っていくことが言える。また、表記別の意味分類の比率を示すと、表16になる。

表16 「ツナグ」の意味分類毎の年次別頻度と比率

表 記	接 続	保 持
繋	81(55.9%)	64(44.1%)
維	0(0%)	21(100%)

「維」においては保持の意味、特に生命や命を対象語とする用例が目立ち、接続の意味には一切使用されないことが分かる。

また、「繫」は1917年の接続の意味の比率が62%、1925年は70%であることから、「維」の使用が減少することも合わせて、ツナグにおいて接続の意味の比重が後年になるほど大きくなることが明らかになった。

4.4 イノル

イノルには「祈」と「禱」の表記が使用されており、各表記の年次別の頻度を示すと、表17になる。

表17 「イノル」における各表記の年次別頻度

表記	1895	1901	1909	1917	1925
祈	51	47	27	56	30
禱	4	4	2	2	0

「禱」の使用は非常に少なく、年を追うごとに減少していく過程がみてとれ、1895年の段階で既に「祈」が主要な表記であったと考えられる。以下にはイノルの一部の用例を挙げる。

(13) 是れ出征軍人の家族が其無事を祈るため、參詣するもの多きに由るならんといふ。

(1895年、著者不明「教界一斑」『太陽』)

(14) 實踐躬行以て未來の幸福を禱る、道を信ずるの深き誠を守る厚きものにあらずんば…

(1901年、金山尚志「北海道に於ける無言の行者」『太陽』)

イノルには、前出のハレル、オビル、ツナグとは異なる特徴として、用例毎に明確な意味・用法の違いがないことが挙げられる。「何に」イノル、もしくは「何を」イノルかの双方の観点で用例を分析したものの、この両表記には意味・用法に差異がないことが明らかになった。

4.5 事例研究のまとめ

ハレル、オビル、ツナグに共通する、表記の合一の傾向として、より広範囲の意味に使用できる表記が使用され続けることが挙げられる。この傾向は合一型に判定された多くの語に当てはまる。

例えばツキルでは、「(力・財産・水などが)なくなる」意味でのツキルには「盡」と「竭」の両表記が使用されたが、「AはBにツキル」のようにカギルに置き換えられる限定的な意味では「竭」が一切使用されないこと確認できた。他の語では、カムの「咬」の表記は犬や蛇などが攻撃を目的とする動作に使用され、食事を目的とする動作にはほぼ使用されないといった事例も見受けられた。いずれの語においても、あらゆる意味分類に対応している表記と、限定された意味分類にのみ

使用が見られる表記が確認でき、万能と限定の関係にある。その他の語では、ムカエルでは「迎」が万能、「邀」が限定、ヒキイルでは「率」が万能、「帥」と「將」が限定、フセグでは「防」が万能、「禦」と「拒」が限定に相当する。

一方、イノルにおいては、複数の表記間で意味・用法の違いがないことが明らかになった。このような複数の表記間に差異が認められない傾向は、アヤシム（怪・異）、タノシム（樂・娛）、トウトブ（尊・貴・尚）、ウエル（植・栽）⁽⁴⁾など複数の語において見られた。この傾向は、意味の範囲の違いによる表記の選択ではなく、単純に役割の重なる二つ（二つ以上）の表記のうち不要な表記が排斥されたと考えられる。また、オビルとハレルにおいて、後年になるほど一つの意味分類に用例が集中することを確認したことから、意味変化を起し、意味の一極化が進んだ語が合一型に分類されることが言える。

なお、合一型に分類される31語のうち、1895年の段階で頻度が優勢であった表記が継続して使用される語は29語であり、前出のハレル（表4参照）、オビル（表8参照）、ツナグ（表13参照）、イノル（表17参照）もこれに該当する⁽⁵⁾。役割の似た複数の表記が合一する場合には、最も頻用されていた表記が選択されたことが考えられる。

5. 結論と今後の展開

本研究では、『太陽コーパス』を用いて用例分析を行うことで、近代における和語の動詞の表記が合一されていく過程と要因を考察した。研究の結果、揺れていた表記が、より広範囲に使用される表記に合一されていくことと、語の意味変化によって意味による書き分けが不要となっていくことが明らかになった。

今後は、本調査で扱わなかった合一型の語の詳しい分析が求められる他、合一型の動詞とその他の型の動詞との関係の考察が課題となる。

注

- (1) 増補版の『太陽コーパス』は、著作権の事情から公開版では削除されていた多くの記事が収録され、1917年・1925年の記事が大幅に増補されている。本論文執筆者は2015年の2月から3月にかけて、国立国語研究所に特別共同利用研究員として在籍したことで、増補版のデータを利用させていただいた。
- (2) 同音異表記の問題においては、語の区分の設定が非常に重要となる。解析に使用した「近代文語 UniDic」は、現代語に対応する「UniDic」の語区分を基に設計されており、また「UniDic」は、複数の現代語の辞書の見出し区分と、現代語のコーパスの用例を参考に区分がなされている（小椋ほか 2011）。近代の用字法に合った区分の設定が必要となるため、本研究では原則的に、歴史的背景を重視した『日本国語大辞典』の見出しの区分によることとする。
- (3) 増補版の『太陽コーパス』は、字体についてはJISの規格「JIS X0213」に基づいて構築されている。本研究は同規格に基づき、原文の表記との差異については考慮しない。また、「アヤシム（怪・恠）」のように異体字の関係にある字であっても、規格に基づき別字として扱う。
- (4) 「ウエツセル」であれば「植」の表記に限定して「印象を植え付ける」のように使用されたが、「ウエル」単体では、植物のみを動作の対象語として取る使用に限定された。

- (5) 1895年と1925年で最高頻度の表記が異なる2語はニクム（憎・悪）とカマウ（構・構）で、これらの語では特定の記事において限定的な使用が多数見受けられた。

参考文献

- 小椋秀樹, 小磯花絵, 富士池優美ほか (2011) 「意味の面から見た同語異語の判別」『現代日本語書き言葉均衡コーパス』形態論情報規程集 第4版 (下)』国立国語研究所, pp.136-168
- 片山久留美 (2012) 「現代和語表記の特質:歴史的アプローチ」『藝文研究』第102号, 慶應義塾大學藝文學會, pp.109-131
- 京極興一 (1998) 『近代日本語の研究—表記と表現—』東宛社, pp.1-397
- 今野真二 (2013) 『正書法のない日本語』岩波書店, pp. 1-189
- 田島 優 (1998) 『近代漢字表記語の研究』和泉書院, pp.1-532
- 高橋雄太 (2015) 「『太陽コーパス』における和語動詞「あう」の用字法」『第7回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』国立国語研究所, pp.195-202
- 田中牧郎 (2005) 「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』論文集』博文館新社, pp.1-48
- 田中牧郎 (2006) 「「努力する」の定着と「つとめる」の意味変化—『太陽コーパス』を用いて—」倉島節尚編『日本語辞書学の構築』おうふう, pp.223-238